知識探訪　多民族社会の横顔を読む
協力：日本マレーシア学会（JAMS）

# ＪＡＭＳ研究大会のシンポジウムに参加して

*山下晋司（東京大学名誉教授）*

第32回日本マレーシア学会（ＪＡＭＳ）研究大会（2024年1月21日、於・東京大学駒場キャンパス）で「混成社会マレーシアにおけるフィールド調査のあり方を巡って――科研費プロジェクトによる共同研究の経験から」と題するシンポジウムが行われた。

主にサバ州を舞台に行われた２つの科研費プロジェクト――1998～2008年度（宮崎恒二代表）と16～23年度（篠崎香織代表）――の問題点を検討し、今後の調査・研究のために役立てるというものだった。私はディスカッサント（コメンテーター）として参加した。

「混成社会」とは「国民が多民族・多宗教・多言語であるとともに外国籍の定住者や短期滞在者も多い社会」のことである。宮崎科研ではサバ州をフィリピン、インドネシアからの移民の多い「ボーダー（境域）社会」と捉え、篠崎科研ではそこにおける社会統合が検討された。以下に議論のポイントを書き出してみる。

１．合同調査。「合同調査」とは、共同研究を行う調査チームが一定期間寝食を共にしながら知見の共有を行う調査方法をいう。２つの科研プロジェクトはこうした合同調査を含んでいた。これにより互いの知見を突き合わせ、調査内容を豊かなものにすることができる。シンポジウムではこの調査方法のメリットについて討議が行われた。

2004年の合同調査の風景――ルングス族のロングハウスにて（筆者撮影）

２．非正規滞在者と調査言語。特にフィリピン人の非正規移民が報告された。彼らは強制捜査を恐れ、自らを「不可視化」して暮らしている。それ故、しばしば調査が困難となる。また、使用言語によって得られる情報、コミュニケーションのあり方は異なってくる。従って、どの言語を使って調査するのかが極めて重要になる。

３．調査者は透明の観察者ではなく、フィールドで生活する主体でもある。現地で飲食し、暮らしながら調査を行う。また、調査の目的や調査者の人生の段階――学生か教員か、若手か年配かなど――によって調査の仕方も変わってくる。こうした調査者の側面に光が当てられることはあまりなかったので、とても面白い議論だと思った。

４．地域研究はかつて先進国と途上国の権力関係に基づいた「帝国主義的な」枠組みで行われていた。今ではそのようなことは許されない。現地のカウンターパートとの協働の体制を作り上げることが大切だ。また、宮崎科研と篠崎科研が行われた時代の違いもある。この間に東南アジアはめざましく発展し、世界情勢も大きく変わった。そうした変化のなかで地域研究を位置付ける必要がある。

マレーシア地域研究のあり方を考える上で非常に有益なシンポジウムだった。学問・研究は１人でではなく、共同で行うものだということを改めて認識した次第である。なお、これを機に登壇者が中心になって「紗葉（サバ）会」を立ち上げ、24年４月よりオンラインで研究会を開き、シンポジウムで提起された問題を掘り下げていくことになった。

＜筆者紹介＞
1948年、山口県生まれ。東京大学名誉教授。専門は文化人類学。主にインドネシアおよびマレーシアでフィールドワークを行い、著書に「儀礼の政治学――インドネシア・トラジャの動態的民族誌」（弘文堂、1988年）「バリ――観光人類学のレッスン」（東京大学出版会、1999年）「観光人類学の挑戦――『新しい地球』の生き方」（講談社、2009年）などがある。


Copyright(C) NNA All rights reserved. 記事の無断転載・複製・転送を禁じます